

熟語らしさ評定に疑似熟語のneighbor数が及ぼす影響(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4860

熟語らしさ評定に疑似熟語の neighbor 数が及ぼす影響 (2)

川上 正浩

臨床心理学専攻教授

要約

齋藤・川上 (1992a, 1992b) は、同音異義語を書記で回答する齋藤・都築 (1989, 1991) の課題中に実験参加者が放出した疑似熟語を調査対象者に呈示し、一定の「熟語らしさ」が感知される疑似熟語の存在を明らかにした。川上 (2021) では、作成された疑似熟語に対する熟語らしさ評定を調査対象者である女子高校生 59 名に対して求め、その熟語らしさ評定に疑似熟語の neighbor 数が及ぼす影響を検討した。その結果、疑似熟語の前漢字の neighbor 数の多寡は、熟語らしさ評定に影響を及ぼすことが示されたが、後漢字の影響については、明確には示されなかった。本研究では、川上 (2021) と同様のパラダイムで調査対象者の人数を 99 名に増やし、疑似熟語の neighbor 数の効果を再検討するとともに、熟語らしさ評定に及ぼす個人特性の影響を検討した。その結果、疑似熟語の前漢字、後漢字の neighbor 数が、熟語らしさ評定に影響を及ぼすこと、調査対象者の知的好奇心や曖昧さを享受する態度が、熟語らしさ評定に促進的な影響を及ぼすことが明らかにされた。

キーワード：疑似熟語, neighbor, らしさ

I 問題と目的

語彙への接近 (lexical access) 過程の解明は、人間の言語処理活動を検討するうえで避けては通れない重要な課題である。日本語の処理過程に関しても、多くの研究が語彙への接近について検討を行ってきた (川上, 2002a, 2002b; 玉岡・初塚, 1995; 米山, 2002 など)。語彙判断課題 (lexical decision task: たとえば川上, 1993 など) は語彙への接近過程の解明に用いられる実験パラダイムであるが、ここでは、呈示される文字列が、語 (word) であるのか非語 (nonword) であるのかに対して迅速かつ正確に判断することが実験参加者に求められる。このパラダイムの前提として、実験参加者の心的辞書 (mental lexicon) 内には、呈示される文字列を実在する「語」と、実在しない「非語」とに二分することのできる、知識と機構とが存在するという暗黙の過程がある

(川上ら, 2000)。

しかしながら、実際の心的な世界においては、そうした単純な二分法的判断が常に行われるわけではなく、語と非語との境界には、語としての「らしさ」が頻繁に立ち現れる。齋藤・都築 (1989) は、国立国語研究所 (1961) によって実施された、所与の文脈に対する同音異義語の書記調査で用いられた 55 項目のリストから、同音異義語の漢字表記が二字熟語となるものに限定して選択を行い、48 種類の、同音異義語に対応する平仮名表記語 (たとえば、「こうえん」、「しんこう」) を用意した。これらが単独で、あるいは特定の文脈とともに (齋藤・都築, 1991) 呈示され、各ひらがな表記語に対応する漢字表記語 (漢字二字熟語) の筆記再生が、調査対象者に求められた。この実験の結果、実験参加者は、実在する漢字二字熟語である「公園」、「進行」以外に、実在しない (辞書に

は記載されていない)「好縁(こうえん)」や「深考(しんこう)」などの疑似熟語を数多く産出した。

齋藤・川上(1992a)は齋藤・都築(1989, 1991)において、実験参加者は、なんらかの心的評価により、生成した漢字対に対して熟語らしさを見出したうえで、これらを表出していると想定し、この“熟語らしさ”を評価する心的評価機構あるいは機能の存在を検討した。調査用紙では、漢字対の読み方を一種類にするために、各評価項目の再認すべき漢字対に対応する平仮名表記が印刷され、調査参加者は平仮名表記語で示される以外の読みによって漢字対の判断を行わないよう教示された。そして、齋藤・都築(1989)において再生された熟語と疑似熟語とが併せて呈示され、それらについて、①「知っているか否か」、②「辞書に載っていると思うか否か」、③「②の判断に対してどの程度の確信があるか」の評定が求められた。その結果、調査参加者が、齋藤・都築(1989)の再生実験において想起された疑似熟語に対して、その心的実在性を感知していることが示された。すなわち、熟語と疑似熟語、あるいは熟語ではないものとの区別においては、既知の熟語に対する知識そのもの(knowledge itself)によってのみ、それが遂行されているのではないことが示され、「熟語らしさ」を評定する機能の心的実在性が示された。

こうした熟語らしさの規定因として、どのようなものが存在するだろうか。刺激が有する特性としては、齋藤・川上(1992)が指摘した、漢字自体の出現頻度や各漢字の結合力(小河ら, 2005)の他に、Coltheart, et al. (1977)が提唱するneighborの数(neighborhood size)があげられる。Coltheart, et al. (1977)によれば、neighborとは単語を構成する文字を1文字のみ別の文字に置き換えることにより作成可能な単語(たとえば“man”に対する“map”や「心理」に対する「心臓」など)である。

川上(2021)は、neighbor数を統制した疑似熟語を作成し、これらに対して齋藤・川上(1992a)

に倣った熟語らしさ評定を調査対象者に求め、この熟語らしさの評定に、前漢字(漢字二字熟語「明暗」における「明」)、後漢字(漢字二字熟語「明暗」における「暗」)がそれぞれ有するneighbor数が与える影響について検討を行った。その結果、前漢字のneighbor数の多寡は、熟語らしさ評定に影響を及ぼすことが示されたが、後漢字のneighbor数の多寡がもつ影響については、明確に示されるには至らなかった。そこで本研究では、川上(2021)におけるデータに、さらにデータを加えて安定させることにより、熟語らしさ評定に、前漢字、後漢字のneighbor数が及ぼす影響について、改めて吟味する。

以上より本研究では、当該疑似熟語が有する特性により、熟語らしさ評定がいかなる影響を受けるかについて確認することを第一の目的とするが、当該疑似熟語の熟語らしさ評定には、個人が有する個人特性の差異も関係すると考えられる。たとえば川上ら(2000)は、調査対象者に熟語完成課題を課し、彼らの熟語に対する知識量を測定した。熟語完成課題は、熟語を構成する前漢字、あるいは後漢字が呈示され、これを手がかりに、調査対象者が熟語を産出することを求める課題である。この課題において、どれだけ多くの漢字二字熟語が産出できたかに基づき、調査対象者は高成績群、中成績群、低成績群の3群に分割された。これら3群間で、疑似熟語に対する熟語らしさ評定値を比較したところ、熟語らしさ評定値は中成績群で最も低く、V字型の関係を示すことが明らかとなった。このように知識量の多寡により、熟語らしさ評定が影響を受けるのであれば、その他の個人特性によって、熟語らしさ評定が影響を受けることも考えられる。本研究では、こうした可能性のある個人特性として、知的好奇心と曖昧さへの態度とを取り上げ、検討する。

知的好奇心は、新奇な対象の探索およびの接近を動機づける本能であり、知的活動を動機づけるとされている。西川・雨宮(2015)は、方向性を定めず新奇な情報や知識を求め探求行動を行う拡散的好奇心と、方向性を定めて矛盾あるいは情報

の不整合について探求行動を行う特殊的好奇心の2つの知的好奇心を測定する尺度を開発している。この知的好奇心が新規な刺激である疑似熟語に対する反応に影響することが予想される。なぜなら、疑似熟語という刺激は、調査対象者にとって新奇な漢字対であることから、知的好奇心が高い調査対象者にとっては、興味関心、あるいは探究の対象になりやすいと考えられるからである。このことから、知的好奇心が高い調査対象者は、新奇な刺激である疑似熟語に対し、安直に「否定」することをせず、より高い興味や関心をもって、「あるかもしれない」と判断する可能性が高いと予想される。

さらに、調査対象者にとって新奇な漢字対については、辞書などの外的基準を用いて熟語か否かの判断を行う以外に、個人内で熟語と疑似熟語を二分することはできない。そのため、新奇な漢字対に触れた調査対象者は当該漢字対について、“熟語らしさ”の程度によって熟語か否かを判断するほかない。したがって、絶対的な判定を下すことができない新奇な漢字対の評定を行う課題は、曖昧な刺激に対してラベリングを行う課題であると言える。すなわち熟語らしさ評定には個人の曖昧な刺激に対する態度も影響を及ぼすと想定される。この個人の曖昧さに対する態度を、肯定的態度・否定的態度の両側面から測定する尺度として、西村(2007)の尺度がある。西村(2007)は、曖昧さへの態度に関する従来の研究のほとんどが曖昧性耐性の高低(特に低さ)という一次元に焦点をあてていることを指摘し、人が曖昧な刺激に接した際、どのような評価や志向性が生じるかを包括的に検討するには区別が不十分であるとした。西村(2007)は、曖昧さへの肯定的態度として“曖昧さの享受”、“曖昧さの受容”、曖昧さへの否定的態度として“曖昧さへの不安”、“曖昧さの統制”、“曖昧さの排除”を測定する尺度を構成した。曖昧さへの肯定的態度の評定値が高い人は、曖昧さへの肯定的態度の評定値が低い人と比較して、曖昧さに対する許容範囲が広い。そのため曖昧な刺激、つまり新奇な漢字対を評定する際に熟

語であると判断を下す熟語らしさの程度の範囲においても、曖昧さへの肯定的態度の評定値が低い人と比較して広く、熟語と判断する疑似熟語が相対的に多くなると考えられる。反対に、曖昧さへの否定的態度の評定値が高い人は、曖昧さへの肯定的態度の評定値が低い人と比較して、曖昧さに対する許容範囲が狭い。そのため曖昧な刺激、つまり新奇な漢字対を評定する際に熟語であると判断を下す熟語らしさの程度の範囲においても、曖昧さへの否定的態度の評定値が低い人と比較して狭く、熟語と判断する疑似熟語が相対的に少なくなると考えられる。

II 方法

要因計画

本研究では、川上(2021)と同様、漢字二字熟語と疑似熟語とを調査対象者に呈示し、その熟語らしさ評定を調査対象者に求めた。使用された熟語および疑似熟語は川上(2021)と同一であり、同一の計画に基づき、分析が実施された。すなわち、本研究においても、疑似熟語を構成する漢字の neighbor 数(川上, 1997)を操作することにより、疑似熟語としての特性が統制された。具体的には、川上(1997)において、漢字二字熟語内の前漢字として使用される程度、後漢字として使用される程度を確認し、前漢字としても後漢字としても「多く」使用される漢字、前漢字としては「多く」、後漢字としては「少なく」使用される漢字、前漢字としては「少なく」、後漢字としては「多く」使用される漢字、前漢字としても後漢字としても「少なく」使用される漢字、の4種類の漢字をピックアップした。これらを HH 漢字(前漢字としての neighbor 数が高く、後漢字としての neighbor 数も高い)、HL 漢字(前漢字としての neighbor 数が高く、後漢字としての neighbor 数は低い)、LH 漢字(前漢字としての neighbor 数は低い、後漢字としての neighbor 数は高い)、LL 漢字(前漢字としての neighbor 数が低く、後漢字としての neighbor 数も低い)と呼び、疑似熟語を構成する前漢字、後漢字それぞ

れに、これら4種類の漢字を配置することにより、前漢字における neighbor 数の多寡 (4: HH 漢字・HL 漢字・LH 漢字・LL 漢字)×後漢字における neighbor 数の多寡 (4: HH 漢字・HL 漢字・LH 漢字・LL 漢字)の要因計画に基づき、16種類の疑似熟語が作成された。しかしながら、この4×4の配置に基づく分析は、処理が煩雑過ぎることから、実際には、疑似熟語構成における漢字の配置を踏まえた neighbor 数の多寡に着目して分析を実施する。たとえば前漢字が HL 漢字であり、後漢字が LH 漢字である場合には、構成される疑似熟語に関しては、前漢字 (HL 漢字)は前漢字として使用される neighbor 数が多く、後漢字 (LH 漢字)が後漢字として使用される neighbor 数も多いことになる。こうした疑似熟語については、HH 疑似熟語、すなわち、前漢字を共有する neighbor 数も後漢字を共有する neighbor 数も多い疑似熟語として取り扱う。すなわち、疑似熟語としての特性として、HH 疑似熟語 (前漢字を共有する neighbor 数が多く、後漢字を共有する neighbor 数も多い)、HL 疑似熟語 (前漢字を共有する neighbor 数は多いが、後漢字を共有する neighbor 数は少ない)、LH 疑似熟語 (前漢字を共有する neighbor 数は少ないが、後漢字を共有する neighbor 数は多い)、LL 疑似熟語 (前漢字を共有する neighbor 数が少なく、後漢字を共有する neighbor 数も少ない)、の4種類の疑似熟語が作成されることになる。これら4種類の疑似熟語は、前漢字の neighbor 数の多寡 (2)×後漢字の neighbor 数の多寡 (2)の2要因配置として捉えることができ、この要因配置に基づいて分析を実施する。

調査時期

調査は2020年6月および2021年5月に実施された¹⁾。

調査対象者

近畿圏のA女子高校に所属する高校生116名が調査に参加した。しかし、後述するスクリーニングの結果、99名 (平均年齢17.4歳、SD=0.50)分のデータを分析の対象とした。

刺激材料の作成と評定による熟語らしさの測定

川上 (2021) と同一の漢字対 (疑似熟語・漢字二字熟語) が用いられた²⁾。川上 (1997) のデータベースにおいて当該漢字を前漢字とする漢字二字熟語の数 (F)、当該漢字を後漢字とする漢字二字熟語の数 (R) の平均がそれぞれ26.6であることを鑑み、当該漢字を前漢字あるいは後漢字とする漢字二字熟語の数が、30以上であれば多い (H)、24以下であれば少ない (L) と見做された。この基準により、HH 漢字、HL 漢字、LH 漢字、LL 漢字がピックアップされ、これらの漢字をそれぞれ前漢字、後漢字として組み合わせることにより、4 (前漢字の H・L: HH, HL, LH, LL)×4 (後漢字の H・L: HH, HL, LH, LL) の16種類の疑似熟語が、各3個、合計48個作成された。この際、同一の漢字が二度以上使用されないよう、配慮がなされた。これらの疑似熟語は、辞書 (Macintosh 版岩波広辞苑第四版) にその漢字表記が見出しとして掲載されていないものであった。

漢字二字熟語24語については、川上 (1999) による漢字二字熟語の主観的出現頻度のデータベースに基づき、比較的主観的頻度の低い (5段階評定の平均値が2.0未満) 漢字二字熟語が選択された。

本課題では、熟語および疑似熟語とその漢字対に対応する読みを調査対象者に呈示し、これらが「辞書に載っている熟語か否か」について判断し、その判断の確信度について報告することを求めた。調査対象者が漢字対を判断する際、複数の読み方がなされないよう、当該疑似熟語に対応する読み方が実験者によって決定され、ひらがな表記で併記された。各条件の疑似熟語における前漢字の F・R、後漢字の F・R の平均値と、その疑似熟語の正書法的 neighbor 数 (前漢字の F と後漢字の R の和) の平均値を算出した (表1)。

調査対象者は、これら疑似熟語48個、漢字二字熟語24個の計72個の漢字対に対して、辞書に載っているか否かの判断と、その判断に対する確信度の記入を求められた。この際、熟語の判断に

表 1 疑似熟語における F・R 平均値と、正書法的 neighbor 数の平均値

疑似熟語種類		前漢字		後漢字		neighbour (前F+後R)	疑似熟語種類		前漢字		後漢字		neighbour (前F+後R)
前漢字	後漢字	F	R	F	R		前漢字	後漢字	F	R	F	R	
HH	HH	50.67	55.00	59.33	40.00	90.67	LH	HH	14.33	49.00	43.33	36.33	50.67
HH	HL	51.67	35.33	37.67	9.67	61.33	LH	HL	10.33	51.67	59.00	9.00	19.33
HH	LH	42.33	45.33	9.33	46.33	88.67	LH	LH	8.67	35.67	7.33	51.00	59.67
HH	LL	50.00	58.67	5.67	7.33	57.33	LH	LL	9.33	38.00	5.00	4.67	14.00
HL	HH	44.00	7.33	63.00	58.00	102.00	LL	HH	9.67	4.00	34.00	41.00	50.67
HL	HL	49.67	8.00	39.33	5.67	55.33	LL	HL	9.67	4.67	33.67	9.00	18.67
HL	LH	35.67	7.67	6.67	39.00	74.67	LL	LH	10.00	4.33	8.00	43.00	53.00
HL	LL	54.67	9.00	8.00	5.00	59.67	LL	LL	9.33	11.00	5.67	7.67	17.00

※Fは当該漢字を前漢字とするneighbor数, Rは当該漢字を後漢字とするneighbor数 (川上, 1997) を表す

については「辞書に載っている」と思えば“1”，「辞書に載っていない」と思えば“0”と記入するよう指示された。また、その確信度については「一番弱い確信度」を“1”，「一番強い確信度」を“3”として、3段階で評定することが求められた。

上記の熟語らしさ評定課題に加え、本研究では①知的好奇心尺度 (西川・雨宮, 2015)、②曖昧さへの態度尺度 (西村, 2007) の2つの尺度が用いられた。

①知的好奇心尺度は、個人特性として、拡散的好奇心 (「新しい事に挑戦することは好きだ」など6項目) と特殊的好奇心 (「物事を学ぶ時には、徹底的に調べたい」など6項目) の2タイプの知的好奇心を、合計12項目で測定する尺度である。本研究では西川・雨宮 (2015) に倣い「まったくあてはまらない (1)」「あまりあてはまらない (2)」「どちらともいえない (3)」「ややあてはまる (4)」「とてもよくあてはまる (5)」の5件法で評定が求められた。

②曖昧さへの態度尺度 (西村, 2007) は、曖昧さに対する人の態度を多次的に捉えるための尺度である。この尺度は“曖昧さの享受” (「いろんな可能性があると思えるのでうれしい」など7項目)、“曖昧さへの不安” (「はっきりしない状況におかれると不安になる」など6項目)、“曖昧さの受容” (「はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい」など5項目)、“曖昧

さの統制” (「情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい」など5項目)、“曖昧さの排除” (「どっちつかずであることはよくないと思う」など3項目) の5つの下位尺度、合計26項目で構成された。本研究では西村 (2007) に倣い「まったくあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (6)」の6件法で評定が求められた。

手続き

大学教員が担当する、高校生向けの心理学系講義の講義時間中 (2020年6月と2021年の5月の2回) に質問紙が配付され、調査対象者は集団で質問紙調査に参加した。2回の実施における対象者は異なる集団であり、この2回で重複して調査に参加した調査対象者は存在しなかった。調査対象者には個人ペースでこれらに回答することが求められ、特に、周囲の人と相談したり、辞書等を調べたりしないで回答するよう求められた。回答所要時間は約15分であった。

倫理的配慮

調査の実施に際しては、その結果が統計的に処理され、個人の結果が問題とされないこと、結果は研究の目的以外に使用されないこと、参加は自由意志によるものであり、いつでも質問への回答を辞められることをフェイスシートに記載し、周知した。これらの記載事項に同意する場合にのみ、調査に参加することが求められた。

Ⅲ 結果

116名の調査対象者のうち、データに欠損値のある調査対象者13名、すべての疑似熟語に対して、「辞書に載っている」と判断した調査対象者4名を分析の対象から除外した。このため、分析の対象となったのは99名分のデータであった。16種類の疑似熟語を、先述のようにHH疑似熟語、HL疑似熟語、LH疑似熟語、LL疑似熟語の4種類に分類し、個人ごとに、4つの条件内12個の疑似熟語のうち、いくつかの疑似熟語に対して「辞書に載っている」と判断しているかをカウントし、この割合を「辞書記載判断率」とした。これは、呈示された24個の漢字二字熟語に対しても同様の処理が施され、漢字二字熟語に対しても個人ごとの「辞書記載判断率」が算出された。

さらに、「辞書に載っている」と判断したか「辞書に載っていない」と判断したかと、その確信度に基づき、調査対象者が当該漢字対に対して感知する熟語らしさを、漢字二字熟語および疑似熟語に対して得点化した。具体的には、「強い確信度(3)で辞書に記載されている(1)とする判断」を6点、「中程度の確信度(2)で辞書に記載されている(1)とする判断」を5点、「弱い確信度(1)で辞書に記載されている(1)とする判断」を4点、「弱い確信度(1)で辞書に記載されていない(0)とする判断」を3点、「中程度の確信度(2)で辞書に記載されていない(0)とする判断」を2点、「強い確信度(3)で辞書に記載されていない(0)とする判断」を1点と変換し、これを個人の熟語らしさ得点とした。個人内で、漢字二字熟語24個、HH疑似熟語、HL疑似熟語、LH疑似熟語、LL疑似熟語それぞれ12個の熟語らしさ得点を平均し、これを各条件における熟語らしさ得点とした。以上の個人得点について、全体での平均値および標準偏差を算出し、辞書記載判断率については表2、熟語らしさ得点については表3に示した。

疑似熟語に対する辞書記載判断率、熟語らしさ得点に対して、辞書記載判断率については、角変換を行なったうえで、前漢字に基づく neighbor

表2 条件ごとの辞書記載判断率の平均値と標準偏差

条件	平均値	標準偏差
漢字二字熟語	.75	0.13
HH疑似熟語	.54	0.19
HL疑似熟語	.53	0.19
LH疑似熟語	.51	0.23
LL疑似熟語	.46	0.19

表3 条件ごとの熟語らしさ得点の平均値と標準偏差 (max=6.0)

条件	平均値	標準偏差
漢字二字熟語	4.64	0.53
HH疑似熟語	3.72	0.57
HL疑似熟語	3.69	0.60
LH疑似熟語	3.65	0.62
LL疑似熟語	3.56	0.52

数(2:H・L)×後漢字に基づく neighbor 数(2:H・L)の2要因分散分析を実施した。辞書記載判断率を従属変数とした分析では、前漢字の neighbor 数の主効果($F(1, 98)=15.22, p<.01, \eta_p^2=.13$)、後漢字の neighbor 数の主効果($F(1, 98)=5.67, p<.05, \eta_p^2=.06$)がともに有意であった。両者の交互作用($F(1, 99)=3.14, p<.10, \eta_p^2=.03$)については、10%水準でその傾向が認められた。主効果については、前漢字、後漢字に基づく neighbor 数のいずれにおいても促進的なものであり、H条件でL条件よりも、辞書記載判断率が高かった。

交互作用を検討するため、単純主効果の検定を実施した。その結果、前漢字がL条件の場合には、後漢字の単純主効果($F(1, 196)=8.47, p<.01, \eta_p^2=.08$)は有意であったが、前漢字がH条件の場合には、後漢字の単純主効果($F(1, 196)<1, n.s., \eta_p^2=.00$)は認められなかった。また、後漢字がL条件の場合には、前漢字の単純主効果($F(1, 196)=16.28, p<.01, \eta_p^2=.14$)は有意

であったが、後漢字が H 条件の場合には、前漢字の単純主効果 ($F(1, 196)=2.45$, $n.s.$, $\eta_p^2=.02$) は認められなかった。

熟語らしさ得点を従属変数とした分析においても、前漢字に基づく neighbor 数の主効果 ($F(1, 98)=9.77$, $p<.01$, $\eta_p^2=.09$)、後漢字に基づく neighbor 数の主効果 ($F(1, 98)=4.02$, $p<.05$, $\eta_p^2=.04$) がともに有意であった。両者の交互作用 ($F(1, 98)=1.16$, $n.s.$, $\eta_p^2=.01$) については認められなかった。ここでも、それぞれの主効果については、前漢字に基づく neighbor 数も後漢字に基づく neighbor 数も促進的なものであり、H 条件で L 条件よりも、熟語らしさ得点が高かった。

熟語らしさ評定と個人特性との関連

さらに、同時に実施された、個人特性を測定する尺度について、それぞれの先行研究に倣い、個人ごとに得点化をおこなった。西川・雨宮 (2015)

に倣い、知的好奇心尺度に対して拡散的好奇心得点、特殊的好奇心得点の 2 つの下位尺度得点が個人ごとに算出された。また、西村 (2007) に倣い、曖昧さへの態度尺度に対して曖昧さの享受得点、曖昧さへの不安得点、曖昧さの受容得点、曖昧さの統制得点、曖昧さの排除得点の 5 つの下位尺度得点が個人ごとに算出された。これらの下位尺度得点に対して、平均値および標準偏差を算出した結果を表 4 に示した。

以上の個人特性に関する下位尺度得点について、HH 疑似熟語、HL 疑似熟語、LH 疑似熟語、LL 疑似熟語、疑似熟語全体、漢字二字熟語全体、それぞれに対する辞書記載判断率 (表 5) および熟語らしさ得点 (表 6) との相関係数を算出した。

知的好奇心尺度に関しては、拡散的好奇心が、HL 疑似熟語、LL 疑似熟語および疑似熟語の辞書記載判断率、また HL 疑似熟語の熟語らしさ得点と、1%あるいは 5%水準での有意な相関を示

表 4 個人特性に関する尺度得点の平均値および標準偏差

	条件	平均値	標準偏差
知的好奇心尺度	拡散的好奇心	3.03	0.78
	max = 5.00	特殊的好奇心	3.11
曖昧さへの態度尺度		曖昧さの享受	3.93
	曖昧さへの不安	4.40	0.82
	max = 6.00	曖昧さの受容	3.62
		曖昧さの統制	4.31
		曖昧さの排除	3.82

表 5 各疑似熟語に対する辞書記載判断率と個人特性との相関

		HH疑似熟語	HL疑似熟語	LH疑似熟語	LL疑似熟語	疑似熟語	熟語
知的好奇心尺度	拡散的好奇心	.162	.307 **	.157	.240 *	.243 *	.042
	特殊的好奇心	.210 *	.201 *	.200 *	.212 *	.233 *	.240 *
曖昧さへの態度尺度	曖昧さの享受	.180 †	.207 *	.156	.214 *	.213 *	.066
	曖昧さへの不安	-.047	-.080	.050	-.035	-.027	.029
	曖昧さの受容	-.039	.008	.041	.068	.023	.045
	曖昧さの統制	.064	-.059	.087	.016	.034	.171 †
	曖昧さの排除	.047	.017	.084	.009	.047	-.001

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表6 各疑似熟語に対する熟語らしさ得点と個人特性との相関

		HH疑似熟語	HL疑似熟語	LH疑似熟語	LL疑似熟語	疑似熟語	熟語
知的好奇心尺度	拡散的好奇心	.155	.279 **	.116	.129	.193 †	-.036
	特殊的好奇心	.179 †	.212 *	.180 †	.168 †	.210 *	.177 †
曖昧さへの態度尺度	曖昧さの享受	.154	.163	.066	.077	.130	-.033
	曖昧さへの不安	-.046	-.055	.019	.055	-.009	.012
	曖昧さの受容	.013	.027	.035	-.002	.022	.074
	曖昧さの統制	-.061	-.078	-.018	-.049	-.058	.095
	曖昧さの排除	.023	-.021	-.036	-.108	-.038	-.116

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

した。また、特殊的好奇心については、熟語を含め、すべての条件での辞書記載判断率、HL 疑似熟語および疑似熟語の熟語らしさ得点と、1%あるいは5%水準での有意な相関を示した。曖昧さへの態度では、曖昧さの享受が、HL 疑似熟語、LL 疑似熟語および疑似熟語の辞書記載判断率と5%水準の有意な正の相関を示している以外には、5%水準での有意な相関は認められなかった。

IV 考察

本研究では、neighbor 数を統制し、人工的に作成された疑似熟語に対する熟語らしさ評定が女子高校生に求められた。疑似熟語については、前漢字、後漢字の neighbor 数が独立に操作された。また従属変数として、辞書に記載されていると思うか否かの判断と、その判断に対する確信度が測定され、これに基づいて、辞書記載判断率、熟語らしさ得点が算出された。同様のパラダイムで調査が実施された川上 (2021) では、辞書記載判断率に対して前漢字、後漢字それぞれの neighbor 数の影響が認められ、いずれにおいても、neighbor 数が多い疑似熟語の方が、より辞書に記載されていると推測された。しかしながら、確信度をも含めた熟語らしさ得点においては、前漢字の neighbor 数のみが影響を示しており、後漢字の neighbor 数については、その影響が認められなかった。川上 (2021) のデータに、さらにデータを加えた本研究においては、辞書記載判断率に対しても、熟語らしさ得点に対しても、前漢字、後

漢字それぞれの neighbor 数の影響が認められ、neighbor 数が多い疑似熟語で、より熟語らしさが高いことが示された。川上 (2021) では、後漢字の neighbor 数が熟語らしさ得点には影響を及ぼさなかったこと、また、本研究においても、辞書記載判断率、熟語らしさ得点のいずれに対しても、後漢字の neighbor 数が及ぼす影響の効果量が、前漢字の neighbor 数が及ぼす影響の効果量の半分程度であることを考えると、少なくとも疑似熟語の熟語らしさ評価において、前漢字の影響力の方が強いことが示唆される。

川上 (2003) は、カタカナ表記語の語彙判断課題を用いて、neighbor 数そのものを統制したうえで、それらの neighbor を生み出す文字位置を操作し、この neighbor を生み出す文字位置がカタカナ表記語の語彙判断課題における反応時間に及ぼす抑制的な影響について検討している。その結果、全く類似語を持たないカタカナ表記語 (base 条件) と、最初の位置のみが neighbor を持つ N1 条件、中央の位置のみで neighbor を持つ N2 条件、最後の位置のみで neighbor を持つ N3 条件の3条件に属する単語とに対する反応時間について、N2 条件、N3 条件では base 条件に較べて反応時間が長いことが示されたが N1 条件については、base 条件との間に反応時間の差異は認められなかった。この結果から、川上 (2003) は、見慣れた表記で呈示されたカタカナ表記語の処理においては、左から右への系列的な処理がなされている一方で、単語の輪郭が重要な意味を持

つような、単語全体を一括した処理もなされている可能性を示唆している。また廣瀬 (1992) は、漢字二字熟語の語彙判断課題において、プライミングのパラダイムを用いて、構成文字の処理順序について検討を行っている。廣瀬 (1992) は、プライムとしてその第 1 文字または第 2 文字を呈示し、第 1 文字でより大きなプライミング効果を得た。さらに、呈示語と 1 文字を共有する漢字二字熟語をプライムにする条件では、第 1 文字が同一の場合において、その読みが一致するか否かにかかわらず、プライミング効果が得られた。以上より、廣瀬 (1992) は、漢字二字熟語の意味処理は第 1 文字から第 2 文字へ進むことを指摘している。

さらに水野・松井 (2019) は、呈示される漢字二字熟語の意味が、人間を表すもの (人間語: たとえば“親方”, “知事”) であるか、そうでないもの (一般語: たとえば“母校”, “基地”) であるかをできるだけ速く、かつ正確に分類する意味分類課題を用いて、漢字二字熟語における構成漢字の処理順序について検討を行った。この意味分類課題において、水野・松井 (2019) は、漢字二字熟語の第 1 文字が、人間を表す漢字 (人間字: たとえば“親”, “母”) であるか、そうでない漢字 (一般字: たとえば“知”, “基”) であるかを操作した。その結果、人間字が第 1 文字の場合、人間語の意味分類には促進的影響が、一般語の意味分類には抑制的影響が認められることが示された。同様の意味分類課題において、漢字二字熟語の第 2 文字が人間字か一般字かを操作した水野・松井 (2018) においては、人間字が第 1 文字の場合に、人間語の意味分類に対する促進的影響が認められなかったことと併せて、水野・松井 (2019) は、漢字二字熟語の意味処理においては、各構成漢字は 1 文字目から 2 文字目へと系列的に処理されているが、漢字二字熟語の意味処理と第 2 文字の意味処理がほぼ同時に完了し、本来、構成文字の意味は漢字二字熟語の意味処理に促進的影響も抑制的影響も及ぼしうると結論している。

上述の研究結果は、カタカナ表記語や漢字二字熟語の一般的な処理過程に関する知見であるが、

通常見慣れない疑似熟語の処理においても、前漢字からの処理が進行し、その結果として前漢字の影響がより大きいことが示唆される。さらに、構成文字が有する neighbor 数が、促進的な影響を及ぼすことを、本研究の結果は、改めて示したものであると言える。すなわち、川上 (2021) においても考察されたように、我々の熟語らしさの感知機構は、データベース的に語彙としての漢字二字熟語群が保持されており、それが熟語として認められるか否かに影響を及ぼすことが改めて確認された。

また、本研究と類似したパラダイムで、かな表記された疑似かな語を用いた川上 (2017) においては、音韻的 neighbor 数 (川上, 1998) の効果が顕著であった。本研究において、正書法的 neighbor 数の影響が確認されたことを踏まえ、今後は、かな表記語 (かな表記された非単語)、漢字二字熟語 (疑似熟語) との処理メカニズムを統一的に説明するモデルの構築が必要であろう。

さらに、本研究においては、個人特性と熟語らしさ評定との関係において、拡散的好奇心、特殊的好奇心、曖昧さの享受が、疑似熟語に対する熟語らしさ評定に促進的な影響を及ぼすことが示された。特殊的好奇心についても、熟語らしさ評定への影響が認められたが、本研究においては、実在する漢字二字熟語に対する熟語らしさ評定についてもその影響が認められているため、この特殊的好奇心については、こうした課題における肯定的反応傾向そのものに影響を及ぼしている可能性もある。拡散的好奇心は、新規なものへの興味関心であるとも捉えられる。調査対象者にとって、疑似熟語は新規なものであると想定されるが、こうした対象に対してより深い興味関心を持つ対象者は、これが「実在するかもしれない」とする「らしさ」を検知するようになるのだと思われる。また曖昧さの享受が高いことも、呈示された漢字対が、辞書に記載されている実在の漢字二字熟語であるのか、そうでないのかという曖昧な状況の中で、これを楽しむ傾向であると考えられることから、拡散的好奇心と同様に、興味関心を持って、

これを楽しもうとする傾向が、そのらしさや実在性を認める判断につながるのかもしれない。そして、こうした傾向性は、心霊現象や占い、UFO、超能力など、現代の科学知識では説明がつかない「不思議現象」に対する態度（小城ら，2006；小城ら，2008 など）とも関連し、「曖昧」なものを楽しむ中で、これが信奉につながるというメカニズムを支えている可能性もある。

以上のように、本研究において、疑似熟語の熟語らしさ評定に、疑似熟語の構成文字が及ぼす影響、個人特性が及ぼす影響が明らかにされた。不思議現象に対する態度など、単語認知過程の範囲を超えて、我々の「らしさ」検知機構の解明、部分情報から全体情報を構築する過程を検討することは、人間の環境への適応過程を明らかにするための有効なツールとなることが期待される。

注

- 1) 2020年6月に調査に参加した調査対象者のデータは、川上（2021）で報告されたデータと同一のものである。
- 2) 本研究で使用した疑似熟語および漢字二字熟語の選択は、2018年度に提出された学芸学部心理学科認知心理学ゼミ 斎藤優佳氏の卒業論文に倣ったものである。

文献

- Coltheart, M., Davelaar, E., Jonasson, J. T., & Besner, D. (1977). Access to the internal lexicon. In S. Dornic (Ed.), *Attention and performance VI* (pp. 535–555). New York: Academic Press.
- 廣瀬等（1992）. 熟語の認知過程に関する研究—プライミング法による検討—. 心理学研究, **63**, 303–309.
- 川上正浩（1993）. 仮名語の語い決定課題における表記の親近性と処理単位. 心理学研究, **64**, 235–239.
- 川上正浩（1997）. JIS 一種漢字 2965 字を用いて作成される漢字二字熟語数表—Macintosh 版 岩波広辞苑第四版に基づく類似語数調査—. 名古屋大学教育学部紀要（心理学）, **44**, 243–299.
- 川上正浩（1998）. カタカナ 3 文字語及びカタカナ 4 文字語の正書法的類似語数・音韻的類似語数表—Macintosh 版岩波広辞苑第四版に基づく類似語数調査—. 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, **45**, 95–139.
- 川上正浩（1999）. 漢字二字熟語の主観的出現頻度調査. 名古屋大学教育学部紀要（心理学）, **46**, 245–264.
- 川上正浩（2021）. 熟語らしさ評定に疑似熟語の neighbor 数が及ぼす影響. 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, **14・15**, 35–44.
- 川上正浩（2002a）. 文字単位類似語数および音素単位類似語数がカタカナ語の語彙判断課題に及ぼす効果. 心理学研究, **72**, 528–534.
- 川上正浩（2002b）. 漢字二字熟語の類似語数と構成文字の出現頻度が語彙判断課題に及ぼす効果. 心理学研究, **73**, 346–351.
- 川上正浩（2003）. カタカナ 3 文字表記語の語彙判断課題における位置毎の類似語数の効果. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **2**, 49–57.
- 川上正浩・齋藤洋典・柳瀬吉伸（2000）. 熟語らしさの心的評価機構とその心的実在性：疑似熟語の産出と受容. 認知科学, **7**, 303–318.
- 国立国語研究所（1961）. 同音語の研究（国立国語研究所報告 20）. 秀英出版.
- 小城英子・川上正浩・坂田浩之（2006）. 不思議現象に対する態度の探索的研究. 聖心女子大学論叢, **107**, 39–78.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩（2008）. 不思議現象に対する態度：態度構造の分析および類型化. 社会心理学研究, **23**, 246–258.
- 水野りか・松井孝雄（2018）. 構成漢字の意味が日本語漢字表記語の意味処理へ及ぼす抑制的影響. 心理学研究, **89**, 416–421.
- 水野りか・松井孝雄（2019）. 2 文字の漢字表記

- 語の意味処理に対する構成漢字の影響と処理順序. 心理学研究, **90**, 201-206.
- 西川一二・雨宮俊彦 (2015). 知的好奇心尺度の作成. 教育心理学研究, **63**, 412-425.
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討. パーソナリティ研究, **15**, 183-194.
- 小河妙子・齋藤洋典・柳瀬吉伸 (2005). 二字熟語の語形成における JIS 第 1 水準に属する漢字 2965 字の結合特性. 心理学研究, **76**, 269-275.
- 齋藤洋典・川上正浩 (1992a). 連想記憶における検索過程 (3): 疑似熟語の熟語らしさの評価における心的辞書の関与. 名古屋大学教養部紀要 B, **36**, 67-99.
- 齋藤洋典・川上正浩 (1992b). 漢字二字熟語の「熟語らしさ」の規定因と心的評価機構. 電子情報通信学会, NLC92-1, 1-8.
- 齋藤洋典・都築誉史 (1989). 連想記憶における検索過程: 48 同音異義語に対する検索多様性に関する基準表. 名古屋大学教養部紀要 B, **33**, 69-106.
- 齋藤洋典・都築誉史 (1991). 連想記憶における検索過程 (2): 文脈と共に提示された 48 同音異義語に対する想起反応に関する基準表. 名古屋大学教養部紀要 B, **35**, 49-80.
- 玉岡賀津雄・初塚真喜子 (1995). 漢字二字熟語の処理における漢字使用頻度の影響. 読書科学, **39**, 121-137.
- 米山聖子 (2002). 心内辞書と語彙接近のための語彙表示について (特集 認知科学と音声研究). 音声研究, **6**, 23-34.